集団における対人認知 pattern の実験的研究 : I*

東京女子大学

豊 田 ふ み **

対人認知の研究分野を大ざっぱに分けるなら、適応の観点から認知の正確さをとりあげるものと認知の形成プロセスやパターンそのものをとりあげるものに2分することができる。従来、前者の研究に集中した観のあるこの分野において、今後新しい根本的な研究方向は後者に求めるところが多いと思われる。後者に属する研究としては、Asch(1), Tresselt(8), Newcomb(7), Leventhal(4), Lieberman(5)等のものをあげることができるが、まだ体系的な流れをたどる段階に至っていない。本研究は新しい分野の開拓を旨としたこれらの研究の一翼になうものとして、パーソナリティの観点から認知パターンを分析することを目的としている。今回は、第1報の測定法に関する検討にひき続いて、認知パターン分析に関しての具体的な実験および考察をなしたいと思う。

実 験 目 的

集団における行動様式 (behavior modality) の異なるメンバーからなるグループを構成し、その認知パターンを究明することを目的とする。また empathy の要因をとりあげ、どのように認知パターンに関わるかをみようとするものである。認知の分析は以下のものになされる。

- i) 自己認知のパターン
- ii) グループ認知のパターン
- iii) 他のグループメンバーの認知のパターン
- iv) ソシオメトリック認知パターン
- v) ゲス・フウ・テスト認知パターン

実 験 方 法

i) 被験者の選出法……女子高校2年生約 260名を対象に behavior modality テスト***, empathy テスト***,

ソシオメトリックテスト** を行ない、以下のようなグループ構成に適合する Ss を選出する。behavior modality テストで得た5種の modality タイプと中性的タイプで構成する empathy の高い1グループ、低い1グループ、中間の2グループを実験群としておく。一方統制群としては empathy が中間で modality について中性的なメンバーよりなる2グループをおく。メンバー相互はソシオメトリックテストで既成の親疎関係が特にならないようにチェックする。

ii) グループ・ミーティングの課題

各グループは2回のミーティングをもつ。ミーティングの課題は、本研究の目的にそうよう次の点が考慮される。①グループのまとまりと協力を要するもの。②メンバーが興味をもち、独得の発案をえられるもの。③一般的対人関係又は学校集団内の話題などに関するメンバーの意見を反映するもの、等であり、1) TAT図版を用いて現在、過去、未来に関する物語りをグループで作成することと、2) ひとつのテーマのもとにグループとしての意見をまとめることの2つがとりあげられる。予備実験で検討した結果、TAT図版は4人の友人のものと父子のものをを用いること、話し合いのテーマは「男女共学の是非」と「高校時代の友情」についてとりあげることが適当とみられた。

iii) 認知反応テスト

テストA……ミーティング前に記入するもので、認知パターンに関わる各自の認知構造、行動規範等を知るためのものである。

- ①グループの中で気が合つてなんでもいつしよにやりたい人はどういう行動をとる人か。
- ②逆に気が合わずいつしよにやりたくない人は、どういう行動をとる人か。
- ③グループメンバーとして自分はどのような行動をしたと思うか。

* An experimental study of patterns of interpersonal perception in group: II.

** by Fumi Toyoda (Tokyo Woman's Christian College)

***, ** 第1報参照

* 予備実験で好き——嫌いの形式を用いて検討したところ抵抗の大きいことが示され、本実験では 気が合う——合わない という形式をとっている。

④グループ活動をする場合、グループはどのようなものであれば最も良いか。

テストB……活動後に記入する反応テストである。

a) はテストAと同様9尺度の Semantic Differential Test* を用いて評価する。

a) ①このグループ全体はどうであつたと思うか。

②このグループ活動で自分はどのような態度をとつたと思うか。

③他のグループメンバーはどのような態度を示していたと思うか。

b) ゲス・フウ・テストの形式

①自分と気が合った人は……

②みんなの中心となつたグループのリーダー的な人は……

③グループ全体のことを考えてなかよくやつていこうとした人は……

④グループ活動に熱心だつた人は……

⑤リーダーに協力的だつた人は……

iv) 観察者

予備実験では、特に訓練を与えず気のついたことを記録する程度のきわめて主観的なものであつた。これは認知パターンをパーソナリティの投影という観点からとらえるためには、不十分であると思われた。本実験では客観的に数量的にその活動内容をとらえるために、Bales のカテゴリーシステム**を採用することにした。観察は各活動開始5分後、10分間についてなされた。

実験手続きと結果、考察

3種のテストにより構成されたグループ*** ごとにミーティングを行なう。被験者は県立山形西高校2年約260名の中から選出された34名である。まずミーティング前に認知反応テストを課し、メンバーの紹介などを経てグループ活動に入る。TAT図版をもとに物語りを作ることと、話し合いで意見をまとめることという2課題が与えられる。グループ活動の時間は30分間である。その後認知反応テストB(a)(b)を課し、第1回のミーティングは終了となる。第2回めは反応テストAを除き同様の

* 第1報参照、友好度、優勢度、活動度を示す各々3尺度から成るものである。

** 課題解決に関するアクション(提案、評価、方向づけの応答)と社会情緒面のアクション(同意—不同意、協力的行為—反目的行為、緊張解消—表示)のカテゴリーに分け記録する形式をもつ、参考文献参照。

*** GI…high empathy のグループ、GII…low empathy のグループ、GIII、GIV…middle empathy のグループ、GV、GVI…コントロールグループ。

手続きをとる。両回とも、事前にカテゴリーおよび実例について訓練を与えられた観察者がおかれる。以下は認知反応テストA Bおよび観察データをもとに、実験目的であげた観点より分析した結果である。

i) 自己認知のパターン

友好度、優勢度、活動度を示す尺度からなる Semantic Differential Test を用いて、因子別に各 modality のパターンを画いてみると、1回目より2回目の方が友好度、活動度についてポジティブに認知され、優勢度については変化がないか0に近づく傾向がみられる。modality 別にみると因子についてだいたいC Dは低く、A Bの高い傾向がみられる。グループ間にはある程度共通なパターンがみられるが、しかし、グループの個体差も無視できない。これは、個人的なレベルではおさえられないグループ全体の要因が、大きく自己認知に関与していることを示唆しているとみられる。自己認知は“一般化された他者”と称されるとおり、グループメンバーの反応をとおして形成されると考えられるからである。また、他のメンバーから与えられた認知平均と自己認知の差をグループ (empathy), modality, 時間の要因で分析したところ、最も関わると思われた empathy の要因も時間との交互作用の形でとらえられるという示唆を得たにすぎず、他の要因は有意* ではなかつた。また、ソシオメトリの要因を加味して、ポジティブな関係にある他のメンバーからの認知とネガティブな関係にあるそれと自己認知の差を分析したところ、なんら有意な差はみとめられなかつた。因子別に、他のメンバーからの平均と自己認知の差を距離と方向でとらえて modality 間の傾向を分析したところ、有意差はみられなかつたが、友好度と活動度は自己に対して一般に厳しいパターンを示していた。

ii) グループ認知パターン

各グループの平均認知点を因子別に検討してみると、

Table 1 グループ全体に関する平均認知と各メンバーの認知差の分散分析表

変 動 因	平 方 和	自 由 度	不 偏 分 散	F ₀
Group	10.07	3	3.36	1.76
Modality	24.35	5	4.87	2.56
Time	45.43	1	45.43	24.12**
G. × M.	75.24	15	5.02	2.64*
M. × T.	5.77	5	1.15	0.60
T. × G.	38.89	3	12.96	6.82**
誤 差	28.52	15	1.90	
全 体	228.27	47		

グループによつて全体の活動状況がいちじるしく異なる

ことがわかる (Fig. 1)。しかし第2回目の認知が第1回

Fig. 1 グループ全体に関する認知の平均プロフィール

GI high empathy group
 GII low empathy group
 GIII middle empathy group
 GIV middle empathy group

目よりもポジティブの方向にあること、認知点の分布は友好度が最も高く活動度、優勢度という順になること等共通している。グループ全体に関するメンバーの平均認知と各メンバーの認知の差をグループ(empathy)modality、時間の要因で分散分析すると Table 1 の結果が得られた。時間の要因、グループと modality、グループと時間の交互作用に有意差がみられた。また、empathy の低い G II だけに第1回目より第2回の平均からの差が大きくなるという現象をみとめられた。これらは、時間の要因をとおして empathy が効いてくるのかもしれないことを示唆している。グループの平均認知点からの各メンバーの距離と方向を modality ごとに分析してみると、3 因子について有意差がみられた。そこで modality の平均認知点を検討してみると Fig. 2 でみるように、AB はすべてポジティブ、CD はネガティブそして EF はだいたいその中間であることがわかる。これは個人の modality と全体に対する認知の関わり合いの密接さを

Fig. 2 modality 別グループ全体認知のパターン

示すものであり、各人の modality からグループ認知のパターンがとらえられることを示唆しているといえる。次に因子間の関係をみてみると、友好度—活動度の間にはプラス⇄プラス、マイナス⇄マイナスの関係がみられる。これはグループの根本的な成立条件間の均衡として説明可能なのではないだろうか。

iii) 自己認知とグループ認知の関係

グループと自己をどのように区別して認知しているか、つまりグループ全体とその中の1メンバーとしての自己の認知の分化がどのように見られるかを検討するために、両者の差をグループ、modality、時間の要因で分析したところ、おのおのの要因およびその交互作用は有意でなかった。グループと自己の認知点の関係を検討するために因子別に両者の相関をとつてみると、友好度については .88、優勢度については .79、活動度については .82 という非常に高い相関関係がみられた。次に両者に関する“どうあるべきか、どうありたいか”という行動規範が、両者の認知の仲介的役割を果たすかどうかをみるために、次のような検討を行なった。理想的なグループ認知像と実際のグループ認知の差と、理想的な自己認知像と実際の自己認知の差の相関で検討した結果、.69 というかなり有力な相関が得られた。これは自己の規範像からの実際の自己認知のずれが大きければ、グループに関するそのずれも大きくなる傾向があること、そしてまたその逆もいえることを示唆しているといえる。結局グループと自己の認知には、グループ、modality、時間等に関わりなく高い相関がみられ、両者の関係は行動規範によつても説明される可能性をもつと思われる。

* 有意水準は危険率 5% 以下におく。本文中の有意とはすべてこの水準にある。

Table 2 他のメンバーに対する認知の因子別分散分析表

因子別 scale		友好度				優 勢 度				活 動 度			
認知者 modality	変 動 因	平方和	自由 度	不偏分散	F ₀	平方和	自由 度	不偏分散	F ₀	平方和	自由 度	不偏分散	F ₀
A	対 象 の modality間	149.55	4	37.39	5.49**	306.20	4	76.60	10.48**	799.30	4	199.83	17.92**
	個 人 差	511.25	75	6.81		547.40	75	7.29		835.90	75	11.15	
	全 体	660.80	79			853.60	79			1635.20	79		
B	対 象 間	150.50	4	37.63	13.83**	147.30	4	36.83	18.70**	551.27	4	137.82	65.63**
	個 人 差	203.90	75	2.72		147.90	75	1.97		157.53	75	2.10	
	全 体	354.40	79			295.20	79			708.80	79		
C	対 象 間	155.99	4	38.99	25.48**	93.20	4	23.30	13.39**	515.30	4	128.83	33.03**
	個 人 差	115.21	75	1.53		130.80	75	1.74		292.70	75	3.93	
	全 体	271.20	79			224.00	79			808.00	79		
D	対 象 間	261.70	4	65.43	17.78**	243.80	4	60.95	23.81**	832.00	4	208.00	66.24**
	個 人 差	275.90	75	3.68		192.20	75	2.56		235.20	75	3.14	
	全 体	537.60	79			436.00	79			1067.20	79		
E	対 象 間	26.30	4	6.57	12.90**	41.30	4	10.33	3.39**	314.80	4	78.70	13.41**
	個 人 差	38.30	75	0.51		228.70	75	3.05		440.40	75	5.87	
	全 体	64.60	79			270.00	79			755.20	79		
F	対 象 間	108.80	4	27.20	11.98**	121.30	4	30.33	8.84**	460.87	4	115.22	23.66**
	個 人 差	170.40	75	2.27		257.10	75	3.43		365.53	75	4.87	
	全 体	279.20	79			378.40	79			826.40	79		

iv) グループメンバー相互の認知パターン

④ 他者に対する認知パターン

他のメンバーをどのように区別して認知しているかを検討するために、すべてのメンバーの組み合わせで認知対象間の差を算出し、グループ、modality、対象間の要因で分散分析にかける。その結果、第1回、第2回とも3要因およびグループとmodalityの交互作用項が1%レベルで有意であり、さらに2回目ではグループと対象間、modalityと対象間の交互作用も有意となり複雑な関わり合いを示している。コントロールのGV、GVIについて対象間の認知差を、メンバー、対象間、時間の3要因で分散分析にかけると要因と交互作用項について有意な差がみられ、中性的なメンバーのみからなるグループにおいてもおのおのの対象を有意に区別し認知していることを明らかにしている。つまり、対人状況の全体的な場のおりなす相対的な関係のもとで、メンバー相互の認知がなされることを示唆している。次に因子別に認知者の平均認知点を基準として、他のメンバー認知のずれ（距離と方向）を認知者のmodalityから分析する。そ

の結果、サンプル数が少ない点を考慮して便宜的な統計処理*をしてみると、すべての認知者について対象間の認知パターンに有意な差がみられる(Table 2)。つまり、もつと実験の規模を大きくすれば、この傾向がはつきり示される可能性がある。このように有意な差が得られた他のメンバー認知の傾向を認知者のmodalityごとに因子別にみているとFig. 3のとおりになる。これにより、各自の平均認知点を基準とした場合にはmodalityによつて類似した認知パターンが得られることがわかる。しかし各自の基準点は絶対的には異なる。

⑤ 同一対象に対する認知パターン

同対象を認知しても、すべての人が同様に認知するわけでない。これを明らかにするためにグループ、対象、認知者間の要因で、各対象の認知点を分析すると第1回目はグループ間、対象間、その交互作用項について有意であり、第2回目は3要因とそれらの交互作用すべてについて有意であつた。また中性的メンバーのみからなる

* 便宜的にサンプル数がかりに2倍になつた場合を想定して処理している。

GⅤ, GⅥについて、対象の観点から、認知者間、対象間、時間の要因で分析した結果、GⅤでは交互作用についてのみ有意差がみられ、GⅥでは個々の独立要因についても有意差がみられた。このGⅤとGⅥの間にみられる違いは活動状況の違いで説明されるであろう。課題解決面の比率は課題をもつグループ活動が進むについて多くなることは Bales によつて報告されているが、カテゴリーの内容を検討することによつて容易に推定できることである。観察データによると課題解決面の比率はGⅤは 43.5%, GⅥは 52%, 社会情緒面についてはGⅤは 56.5%, GⅥは 48%を占めている。ここからGⅤはGⅥに比し課題解決面の比率が低く、相対的な意味での認知分化が進まず中性的な modality の特性が残っていたとみられるであろう。次に対象が認知者の modality によつてどのように異なつて認知されるのであるかを、対象が他から受けた平均認知を基準としたずれの大きさで分析してみるとすべての因子について有意な差はみられなかつたがサンプル数を大きくすれば有意となるであろうと推定されるものであつた (Table 3)。この仮定の

もとに同一対象に対する認知者 modality の平均認知点による認知パターンを検討してみた。友好度については、BEとACDFが対立的なパターンをもち、優勢度についてはBはプラス、Cはマイナス、Fは対象認知の平均的パターンをもつが、ADEにははつきりしたものがみられない。活動度についてはBEとCDとは対立的な認知をもち、AFにははつきりしたものがみられない。以上のように、因子別に対象に与えられた認知の平均点を基準として各認知者のパターンを検討した場合、対象の相異にかかわらずある傾向をもつことが示されたといえる。しかし、因子別に各 modality 特性から対立パターンを解釈することは困難であり、全体から切り離された因子間の相互関係だけでは説明できないと思われる。次に基準となつた対象の平均認知点について検討してみよう。これを図示すると Fig. 4 のとおりであり、グループによつて量的な差があるとはいえ相対的にはほぼ同様の認知パターンを得ていることがわかる。ここで得られたパターン、つまり実験的なグループという対人状況での認知パターンを対人状況における一般的な行動傾

Table 3 同一対象の受ける認知の因子別分散分析表

因子別 scale		友好度				優勢度				活動度			
対象	変動因	平方和	自由度	不偏分散	F。	平方和	自由度	不偏分散	F。	平方和	自由度	不偏分散	F。
A	認知者間	34.85	4	8.71	2.06	24.44	4	6.11	3.07*	13.91	4	3.48	0.84
	個人差	316.34	75	4.21		149.79	75	1.99		309.28	75	4.12	
	全体	351.19	79			174.23	79			323.19	79		
B	認知者間	14.10	4	3.52	0.66	25.70	4	6.42	2.23	29.00	4	7.25	3.26*
	個人差	395.89	75	5.27		215.90	75	2.87		165.40	75	2.21	
	全体	409.99	79			241.60	79			194.40	79		
C	認知者間	226.98	4	56.74	13.41**	71.57	4	17.89	5.80**	203.20	4	50.80	12.48**
	個人差	317.42	75	4.23		231.41	75	3.08		305.60	75	4.07	
	全体	544.40	79			302.98	79			508.80	79		
D	認知者間	138.35	4	34.59	6.19**	76.30	4	19.08	3.30*	212.20	4	53.05	8.09**
	個人差	418.42	75	5.58		434.10	75	5.78		491.00	75	6.55	
	全体	556.77	79			510.40	79			703.20	79		
E	認知者間	39.78	4	9.94	3.08*	15.31	4	3.83	1.68	49.70	4	12.43	6.47**
	個人差	241.82	75	3.22		170.21	75	2.27		143.90	75	1.92	
	全体	281.60	79			185.52	79			193.60	79		
F	認知者間	87.36	4	21.84	3.09*	45.70	4	11.43	3.08*	83.70	4	20.93	5.34**
	個人差	529.04	75	7.05		277.50	75	3.70		293.90	75	3.92	
	全体	616.40	79			323.20	79			377.60	79		

Fig. 3 因子別の認知者認知パターン

0 : 各認知者の認知点の平均値
 横軸 : 数値は平均からの方向と距離

向の典型タイプとしてのいわゆる modality タイプの観点から比較してみると、Bが非友好的でないこと、Cが友好的とはいえないこと、Dが非友好的とはいえないこ

と、Eが活動的であること等が指摘される。パーソナリティとしての modality は一応一貫して一般的にみられるものと考えられたのであるが、状況という場の要因が強く関与していることが示唆されたといえよう。そしてこの認知パターンを観察データと比較してみると、この状況における action の内容と認知の密接さを知ることができるのである。Fig. 5 は課題解決面の質疑、応答と社会情緒面のプラス、マイナスに分けた action の比率を図示したものである。これを Fig. 4と比較すると、社会情緒面の action と友好性の認知、課題解決面の action と活動性の認知とが対応関係にあることがわかる。社会情緒面のアクションは課題解決面に比して modality 間にいちじるしい差はみられず、modality が大きく関与しているとはいえない。これは友好性の認知が状況という場の要因に依存するところが多いことを意味し、典型的な modality パターンと現実の認知パターンのずれに友好性に関するものが多くみられることも説明される。

v) ソシオメトリック認知

第1報 であげた親和性の仮説は、その基底となつた 8 modality が現実には得られなかったため検証不能であるが、ここでは modality と対人的好悪感情の関係の分析を試みる。まず因子別にソシオメトリー得点の関係をみてみると、ソシオメトリーでのポジティブ（ネガティブ）な認知と友好度、活動度のポジティブ（ネガティブ）な関係という均衡関係がえられ、非均衡状態は回避されやすいことが明らかとなつた*。ただし優勢度には明らかな関係はみられない。これは他の因子内容との組み合わせによつて優勢度の意味づけが違ってくるためであろう。以上の結果からソシオメトリーでポジティブと認知される modality タイプは、A：民主的なリーダー格のメンバー（友好度、活動度＋、優勢度＋）F：協調的なフォロアー格のメンバー（友好度、活動度＋、優勢度－）であり、ネガティブと認知されるタイプはD：すべてに無関心なメンバー（友好度、活動度－、優勢度－）と破壊的メンバー**（友好度、活動度－、優勢度＋）といえる。これは、modality とソシオメトリー得点分布の一致性検定により検証され、認知者の modality タイプに関係なくソシオメトリーの認知パターンは一様なものであることが明らかとなつた。また、ソシオメトリック認知のパターンを説明するものとして規範的認知像との関係をみてみたところ、ポジティブ（ネガティブ）な

* F. Heider の均衡理論参照、参考文献(3)

** 仮説的 modality タイプの1つであるが現実には得られなかつたタイプである。

Fig. 4 他のメンバーから受けた認知の平均の因子別プロフィール

ソシオメトリ認知は規範的なポジティブ（ネガティブ）認知像に近いという関係がみられ、さらに各自の行動規範との相関も高いことが明らかとなった*。

vi) ゲス・フウ・テストによる認知

反応テストB(b)によるものであるが、リーダーに協力的であつた人という項目は、リーダーが決められていないグループ構成上、不適とみられる。

④ 自己認知パターン

グループ、時間を無視して modality ごとに○該当、△不明、×不該当に+1, 0, -1の得点を与え認知得点を図示すると、Fig. 6 のとおりである。リーダー得点についてのみプラス、マイナスにプロフィールされており、ABが高くCDが低いのは自己の役割が明らかに

認知されているとみてよい。なかよし得点、熱心得点は modality にかかわらずプラスの方向にあり、メンバーの参加意志と意欲を示すものとみられる。

⑤ 他者からの認知パターン

他のメンバーから与えられた認知得点を、グループ、modality の要因から分析すると、リーダー得点、なかよし得点、熱心得点について modality 間に有意差がみられたがグループ間には有意でない。これは役割の認知には empathy の要因が関係していないことを意味する。次に modality 別に3項目についてプロフィールしてみると、自己認知とほとんど同様の傾向がみられる。このように他者からの認知と自己の認知が密接な関係にあるのは、自己の認知が他者との相対的な関係から決定され、他者による認知から形成されることを意味するのであろう。コントロールグループGVGVの他者についての認知の分化を検定でみてみると、リーダー得点のみ

* “どうありたいか”という行動規範とポジティブなソシオメトリック認知像の相関は、友好度 0.79 優勢度 0.16 活動度 0.60 となつている。

Fig. 5 観察データ アクションの% (第2回目の結果より)

Fig. 6 ゲス・フウ・テストによる自己認知得点のプロフィール

有意差がみられたが、なかよし得点、熱心得点についてはみられなかった。これは中性的なメンバーのみからなるグループにおいても機能分化は著しいことを示しているとみられる。

問題点の検討

i) 同種の modality からなる各グループの活動状況は観察データから、およびそれらと対応関係にある他者平均認知、グループ認知などからも明らかのように非常に異なっていた。本研究は集団という対人状況の中でとらえた個人のレベルの上に立つて個人と集団の両方を見ようという意図の下に行なわれた。集団内の状況も、個人のレベルとそれらの相互作用の結果として解明できであろうという立場に立っている。そしてその根本となるものを集団状況における パーソナリティ、つまり modality とみたのであるが、現実に呈示されたグルー

ブ状況の違いはどう考えるべきであろう。ひとつには、因子分析の際見落されたような個人のレベルでの因子特性が別に存在し、それがグループ状況に強く関わつてしまつたとみることができであろう。また、根本的に個人のレベルではコントロールできないなんらかの力が、グループに存するとみることでもできると思う。どちらにしてもこの点について今後の検討、考察が望まれる。

ii) 認知パターンに関わるものとして、modality、自己の行動規範、グループ規範、親和状態、対人的場の構成などを見いだすことができたのであるが、基本となつた modality の因子関係から説明できなかった認知パターンの面について2つの見方が可能である。すなわち i) と同様見落された因子特性を仮定すること、また全体から切りはなされた因子間の関係という観点に問題があるとみることである。今後、この点についても検討されねばならない。

iii) 認知パターンに関わるものとしてとりあげた empathy は、時間的な要因をとおして有効になるかもしれないという示唆を得たにすぎなかつた。この点についてどう考えることができるであろうか。ひとつには、明らかな変化をもたらす要因となるにはメンバー数があまりに少なかつたというグループ構成上の問題があげられる。しかし、根本的には empathy の概念のあいまいさと、操作上の問題に帰せられるのではないだろうか。従来の empathy の扱い方を現象面からと深層面からの観方に分けることができるが、両者の相関についてみると Bender と Hastolf (6) (1953) は +.23、本研究では +.09 というほとんど無関係な結果を得ている*。本研究は empathy を深層面から、つまり関係性をとり除いたポテンシャルなものを測定しようとするものであるが、とりあげ方によつて empathy が異なつた形でみられるということは、一元的な empathy を規定することに問題があるとみなされる。それゆえ、今後の方向として多元的、複合的、潜在的な意味をもつと仮定される empathy が現実にはどのように発現していくのであるかを、いろいろな実験事態のもとで分析、考察し、操作的な概念規定を与える必要があると思う。認知パターンに関わる empathy の要因は、そのうえではじめて明確となるだろう。この点について、今後の精密な考察が要求される。

iv) 中性的メンバーのみからなるコントロールグループ

* 本研究の empathy 測定の方法でとらえたものと従来の現象的とり上げ方（自分の予想と、他からの評価の実際のずれの大小による測定法）の相関をみたものである。

ブの認知パターンは、実験パターンほど分化したものはみられなかつたとはいえ、相対的な認知分化を示していた。また、実験グループ内の中性メンバーの行動傾向と比較すると、非常にバラエティーに富んだ行動傾向を観察データからみることができ、対人的場の構成の違いが行動傾向に強く関与することを明らかにしている。この行動傾向と認知パターンの関係が密接であることを考慮に入れるなら、今後対人的場の構成の違いによりどのように発現するものか、つまりどのような認知パターンを示すものとなるかが検討されねばならない。

要 約

本研究はパーソナリティつまり対人状況における一般的な行動傾向から認知のパターンを分析し、あわせて empathy の要因をも分析しようとするものである。160名の高校2年生を対象に予備実験をなし、種々の検討をへた後（第1報）で検討した測定法を用いて、260名の高校2年生を対象に本実験の被験者選出を行なつた。behavior modality テスト、empathy テスト、ソシオメトリックテストを行ない、6 modality で構成する empathy の高低中の実験グループと、中性的な modality をもつ empathy の中間なコントロール・グループをおいた。各グループは2課題のもとにグループ活動を行ない、ミーティング前後に認知反応テストが施行された。2回のミーティングの結果得られた認知反応と観察データに基づいて、以下のような認知パターンが分析された。すなわち自己認知パターン、グループ認知パターン、他のグループメンバーに対する認知パターン、ソシオメトリック認知パターン、ゲス・フウ・テストによる認知パターンである。その結果、次の点が明らかにされた。

① 認知パターンには、modality が強く反映される。特に自己認知、グループ認知にいちじるしい。

② 認知パターンには、自己の行動規範、グループ規範等が強く関わっている。

③ 認知パターンには、本研究法でとらえた empathy は直接関わらず、時間的媒介をとおしてとらえることが示唆されたといえる。

④ 認知パターンには親和性が強く関与する。親和的になるにつれ、ポジティブな方向に向う傾向とますます複雑な要因の関わり合いを示すようになる。

⑤ 認知パターンには対人的な場の構成が関わる。

⑥ 認知パターンは、行動観察データと密接な対応関係にある。

文 献

- (1) Asch, S. E. : Forming impressions of personality. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1946, 41, 258—290.
- (2) Bender, I. E. & Hastorf, A. H. : On measuring generalized empathic ability. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1953, 48, 503—506.
- (3) Heider, F. : Attitude and cognitive organization. *J. Psychol.*, 1946, 21, 107—112.
- (4) Leventhal, H. : Cognitive process and interpersonal predictions. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1957, 52, 176—180.
- (5) Lieberman, M. A. : Sociometric choice related to affective approach. D. Stoch & H. A. Thelem (eds.): *Emotional dynamics and group culture*. National Training Laboratories, 1958.
- (6) Lippitt, R. & Heyns, R. : Systematic observational techniques. G. Lindzey (ed): *Handbook of social psychology*, Vol. I. Addison-Wesley, 1954.
- (7) Newcomb, T. M. : The cognition of persons as cognizers. R. Tagiuri & L. Petrullo (eds.): *Person perception and interpersonal behavior*. Stanford Univ. Press, 1958.
- (8) Tresselt, M. E. & Fensterheim, H. : The influence of value systems on the perception of people. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1953, 48, 93—98.

(1962年8月14日原稿受付)

$$\sum_{j=1}^i R(a_{ij}, k) = 2^{k-1} \quad (3)$$

Let $S(a_{ij}, a_{pq})$ be defined as follows

$$S(a_{ij}, a_{pq}) = \sum a_{ij} a_{pq}$$

where $\sum$ is sum with respect to Mutually Independent Serial Response Patterns. ($i \neq p, j \neq q$)

then

$$S(a_{ij}, a_{pq}) = 0 \quad \text{when } j \neq q \quad (5)$$

Using (3)~(5), a complete-multi-series (1-1) is abstracted from the Mutually Independent Serial Response Patterns.

Incomplete-multi-series (1-2) may also be abstracted analytically.

A tentative method is proposed for determining each term in these formulae empirically.

AN EXPERIMENTAL STUDY OF PATTERNS OF INTERPERSONAL PERCEPTION IN GROUP : II

by

Fumi Toyoda

Tokyo Woman's Christian College

The aims of this study are (1) to analyse the patterns of perception from the viewpoint of personality, which is general behavior modality in the interpersonal situation, and (2) to investigate the factor of empathy with the patterns of perception. A pre-experiment was conducted for the 260 second-year high school subjects. After investigation, the subjects of this experiment were selected by measures treated in part 1, Behavior Modality Test, Empathy Test and Sociometric Test. The experimental groups were composed of six modality type members with high-low-middle empathy. The control group members were only in natural modality type with middle empathy. Each group did two problems and a reactive test questionnaire. Based on the reaction and observation resulted from two meetings, the following patterns of perception were analysed: (1) the patterns of self-perception, (2) the patterns of group-perception, (3) the patterns of perception to other-group-members, (4) the patterns of sociometric perception and (5) the patterns of Guess-Who-Test perception.

As a result, the following points were made clear. (1) The self-perception is understandable from the viewpoint of modality. (2) The group-perception

has concern with familiarity, for it corresponds with modality type of perceiver, considering each factor. (3) A positive, significant correlation is found between self-perception and group perception. (4) When the patterns of perception to other-members are analysed from the viewpoint of perceiver, there are significant differences among objects in each factor. Relative tendency proves to have the same pattern of perception, in spite of the different modality types of perceiver. (5) When other member's perception is considered from the viewpoint of the objects, significant differences are not found on the whole but valid effect is presumed. The patterns of perception in each factor which are given for objects cannot explain with relation of factor, separated from modality type of perceiver. (6) Between sociometric perception and the factor of friendliness-evaluation, between sociometric perception and the factor of participation-activity, balanced relations exist. Though modality types are different, the patterns of sociometric perception are the same. (7) Self-perception from the Guess Who Test is explainable by sense of belongingness and role consciousness. Perceptions from other members correspond with self-perception. (8) The ratio of action in the data

of observation is related with average pattern of perception. (9) The patterns of perception in the control group make clear that much of problem-solving behavior accelerates perceptive differentiation and patterns of perception dependent on the inter-

personal situation. (10) It is suggested that the factor of empathy becomes effective after some experiences in group activity. (11) The patterns of perception seem to be interpretable with normative perception and self behavior-norm.

IDEAL AND REAL EVALUATIONS IN PARENT-CHILD RELATIONSHIP

by

Akiko Ohishi

Tokyo Metropolitan University

Forty-five psychologists were asked to sort 112 items describing various relationships between parents and children, following the method of equal-appearing intervals (9-point-scale on 'better-worse' dimension). From these results 30 items were selected to form a stimulus scale. This scale was administered to urban high school pupils, their parents, and a few others. The Ss were instructed to express the degree of favorableness (i.e., their ideal evaluation) and of endorsement (i.e., their real evaluation) for each item in terms of a 9-point-scale.

1. Ideal evaluations (ISVs) did not differ with age and sex of the Ss irrespective of whether they were parents or children.

2. Real evaluations (RSVs) differed with age and sex of the Ss in certain cases of parent-child relationship: remarkable differences were found with age, sex and parent-child relationship in a set of

items representing 'better' parent-child relationship.

3. Relation between ISVs and RSVs varied with age, sex, and parent-child relationship: discrepancy between ISVs and RSVs was larger in younger and male groups than in older and female groups; in the latter, ISVs and RSVs were almost consistent with each other.

4. When a child had a larger (or smaller) discrepancy between ISVs and RSVs, his parent also had a larger (or smaller) one.

5. Rank correlations between ISVs and RSVs were generally high in almost all groups.

To interpret the above results the concept of "social desirability" was applied for: older groups were much more influenced by social desirability than the younger. Thus the control of the social desirability variable was found to be necessary for establishing the methodology of studying parent-child relationship.